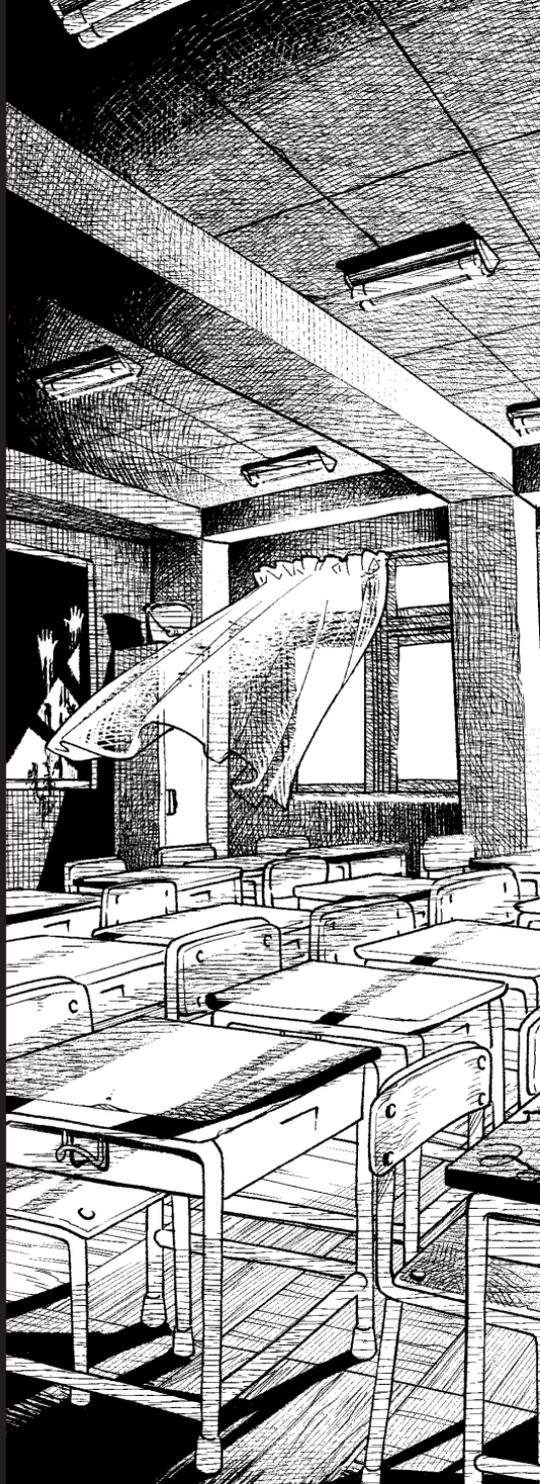


意味
ツツ

10秒で読める
ツツとする話

—
絢郷水沙

Presented by
Mizusa Ayasato



目次

第1章

10秒で読めるゾツとする話

005

乗り過ぎた／仕事帰り／手遅れ／蚊／エサやり／晩ご飯
昔は俺のこと嫌っていたのに／神隠し／廃墟探検
いつからだろう／関係者／お辞儀の理由／友人の部屋
ねこの落書き／不快な存在／どこに行く／珍しい食材／魚料理
気づいたらもつと怖い／くしゃみの音／ガチャガチャ／スリ
悪夢とは何か／一人暮らし／自販機／音漏れ
血となり、肉となり／文化祭／起床厳守／あめ玉／ネット流出
豚骨スープ／メッセージ／解剖実習／首吊り／黒い塊を
曜日の存在／祖母の行方／最後の晚餐／生きたい

第2章

10秒で終わらないゾツとする話

047

だれ？／たたみ／ペチニア／孫のために／居場所／必要なもの
通報／試飲／痛くない／天からの贈り物／一筋の光／順番
二人ドライブ／老人とカラス／会いに行く／何が聞こえるの？
くちやり／なあ、真治

第3章

10秒後にゾツとする話

083

仕方のないこと／老け顔アプリ／人のぬくもり／不死身の証明
緊急事態／運びこまれた患者／とある夜の山小屋の中で
チャットグループ／事情聴取／音／音声ええあい
賞金が出る部屋／縮んだ背／指輪／襲われた女性／誘拐事件
親指／死ぬ準備／人を呪わば穴二つ／遺言書／教室

第 1 章



10秒で読めるゾツとする話

STORY 03 手遅れ

「青酸カリって甘いんですよ」

「えー？ それって本当ですか？」

「本当ですよ。だってそのコーヒー、甘かったでしょ？」



STORY 04 蚊

蚊^かとはおそろしい生き物です。

友人の頭に蚊が止まったのを見たので、持っていた金属バットで蚊をたたきつぶしたところ、大量の血が飛び出してきました。こんなにも蚊に血を吸われていたのかと思うと、私は友人がかわいそうでなりません！

友人は出血多量で蚊に殺されてしまいました。

俺おれがいつものように公園のベンチに座っていると、いつのまにか小さな女の子が一人で公園にやってきていた。

見ているとその子は、数羽のハトにエサをあげている。

俺はあめ玉を手を持って、女の子に近づいた。

「なにしてるの？」

すると、女の子は言った。

「あなたと同じことしてるの」

「俺と？」

俺が自分を指さすと、女の子は首を縦たてにふった。

俺はあめ玉をわたしながら言った。

「じゃあそのハトを、連れ帰って食べるってことだね」

STORY 06 晩ご飯

「今日の晩ご飯はなににしようかなあ。どれどれ、ちょっと探してみますよーっと。」

ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ……ふんふん、皮ばっかりだなあー。

あ、これは牛肉の薄切りうすだ。ふうん、なるほどね。この組み合わせてことはカレーかな。

……あ、ちがう。しらたきもある。ってことは肉じゃがだ。よし！ 今夜は肉じゃがにしよう。肉じゃががー。久しぶりに食べるなあ……」

そう言うとは何者かは、ゴミ袋ごみくちをきつくしめなおした。

昔は俺のこと嫌っていたのに

最近よく、一人暮らしの俺の部屋に姪が来ては、飯を作ってくれる。

この間、俺の兄でもある姪の父親が死んだからか、俺を父親の代わりに思っているのかもしれない。作ってくれるのはありがたいが、それにしても飯がまずい。

「実は父が死んだとき、葬儀屋からクーポンをもらいました」

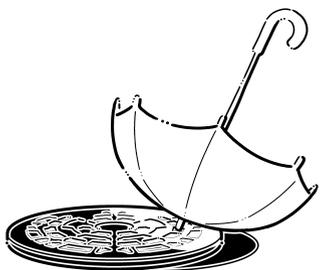
「へえ。どんなの？」

「一カ月以内なら次回の葬式代半額ってやつです」

STORY 08 神隠し

『とあるマンホールには、秘密の地下帝国につながるものがあるんだよ』

甥っ子が神隠しにあう三日前に私がついた嘘です。



久しぶりに廃墟を訪れると、見事に白骨化していました。

STORY 10
いつからだろう

朝起きてリビングに行くとき『記憶がなくなる薬』なるものが置いてあったので、いつからこんなものが置いてあるのだろうと記憶をたどってみたのですが、それが全然思い出せなくて、その事実が怖かったので忘れるためにその薬を飲むことにしました。

STORY 11 関係者

近くで殺人事件があったというので現場を見物している
と、「関係者以外は近づかないください！」と警官にどな
られて、ムカついた僕は、「関係者です」と告げました。
「どんな関係が？」と聞かれたので、「犯人です」と言って
やりましたよ。

STORY 12 お辞儀の理由

同じ土俵に立たなければ見えないものがあります。
これは僕の友人の話なのですが、彼はいつもなにもないと
ころに向かってお辞儀をしていました。彼に聞いても、はぐ
らかしてきます。
ある日僕は死んだのですが、霊体となって彼に会った時、
彼は僕に向かってお辞儀したのです。
つまり、彼には見えていたのです。

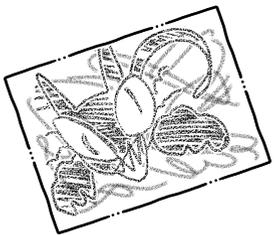
STORY 13 友人の部屋

招待された友人の部屋があまりにも魅力的みりよくだったので、その部屋を『事故物件』にして、安く手に入れることにしました。

STORY 14 ねこの落書き

三才になったばかりの息子が絵かを描かいているので見せてもらうと、かなり独特で不気味だったので、「これなに？」とたずねると「ねこ」と答えたので、こんなねこがいてたまるかと思つたのですが、世の中こゝろって怖いですね。家の前の道に絵かにそっくりなねこがいたんですよ。

車ひに轆ひかれてぐちゃぐちゃになったねこが。



子どものころ、禿げて太っている小汚いおっさんを街中で見かけるたびに、「キモイから消えてくれないかなあ」と思っていたのですが、まさかそれから何十年後に、鏡の中にそいつが現れるとは夢にも思っていませんでした。

STORY 16 どろろに行く

母親がついにボケたのか、むかえに行くたびにどなつてきて、俺は毎回追い返される。なにを言っているのか聞き取りづらいので、なぜ怒っているのかはよくわからない。毎回ヘルパーさんが落ち着かせてくれる。

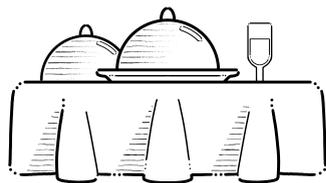
「どうしたんですかそんなに興奮して」

「息子があー。わたしを無理やり連れて行くうー」

「なにを言っているんですか。息子さんは五年前にお亡くなりになられたでしょう」

STORY 17 珍しい食材

「珍しいもの食べさせてやるよ」と友人に言われたので、
「まさか人肉じゃないだろうなあ」と冗談じょうだんで言ったところ、
急にだまってしまったので、丁寧にそのさそいをお断りさせ
てもらいました。
人肉なら食べあきたので。



STORY 18 魚料理

合宿初日の晩に出された夕飯がメニュー表には『スズキ料
理』と書かれていたのに、出てきた料理には一切魚が入って
いなかったので不思議に思っていたのですが、それは合宿初
日に行方不明になった鈴木すずきくんとなにか関係がありますか？

STORY 19 気づいたらもっと怖い

去年の夏のことなんですけどね。

ホラー映画をより怖くしようと思って一人で廃墟はいきよに足を運んで、そこで映画を観ていたんですよ。そしたら予想以上に怖くなっちゃって、最後の方なんかは友達と肩寄せ合かたってふるえながら観ていましたよ。

STORY 20 くしやみの音

「昨日の夜中にくしやみがしてさ。もうびっくりして、そのまま朝まで起きてたんだよね」

「大丈夫？ 風邪かぜひいた？ あなたって一人暮らしだったよね。看病してあげようか？」

「いや、くしやみをしたのは俺おれじゃねーよ」

SHORT 21 ガチャガチャ

姉が急用で家を空けるので姪を預かってほしいとたのまれた。一緒に遊んでいると、「私、ガチャガチャが怖い」と言い出した。

試しに二人でショッピングセンターに出かけ、姪が好きなアニメキャラのおもちゃのガチャガチャをやらせてみたところ、まったく怖がつていなかった。なにかのまちがいだと思っただけの夜の夜。先に寝ていた姪が泣きながらリビングにいた俺のところへやってきた。

二人で寝室に向かうと、だれもないはずの寝室のドアノブがガチャガチャと音を鳴らして激しくゆれていた。

SHORT 22 スリ

スリ歴十年の俺は今日も雑踏に紛れては、名前も知らないだれかの財布を盗む。

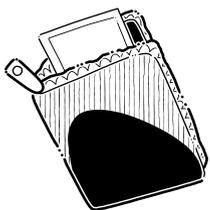
ある日のこと。

俺はサラリーマン風の男の尻ポケットから財布をスった。人気のないところへと移動して、中身を抜き取ろうと財布を開く。

すると――

「え？」

中には一枚の写真が。そこに写っていたのは、まぎれもなく俺の姿だった。



おそろしい奇病きびょうに感染した私に、治療ちりょう効果は高いが服用後に悪夢を見るという薬が処方された。どんな悪夢を見るのか怖こわかったものの、治療のためなら背に腹はかえられないと、服用を決意した。

だがその日見た夢はまるで天国にいるかのようにであった。ずっとここにいたいと思った。夢からさめなければいいのにと願った。

——なるほど、これは悪夢だ。

STORY 24 一人暮らし

一人で住んでいるはずの部屋で冷蔵庫の扉を開けると、昨日食べきったはずの晩ご飯が入っていた。え？ と思っていると、突然知らない人が部屋の中に入ってきた。思わず、

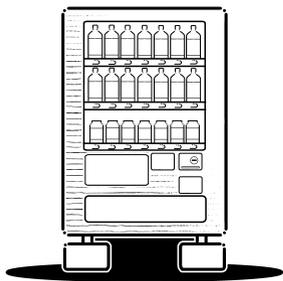
「……だれ？」

と、おどろきながらも問いつめると、

「お前こそ、だれだ!？」

どうやらその人は、この部屋の住人の彼氏かれしでした。

自販機じはんきの下に落ちたコインを拾おうとしてみても、何者かが見つめ返してきた。



ヘッドホンを新しく購入かうにゆうしたので、さっそく使ってみた。音質はなかなかいい。それにこのフィット感は今まで使ったどの製品よりもぴったりだった。

俺おれは調子に乗って、音量を上げた。すると——
「うるさいなあ」

だれかが文句を言ってきた。まずい、音漏おともれか。そう思っ
て、声の方を振り返る。

「すみません。買ったばかりでつい……。え？」

そこにはだれもいなかった。

そういえばここは、俺の部屋だ。

STORY 27 血となり、肉となり

貧乏びんぼうな時は安いモヤシばかり食べていたら、モヤシみたいな体になってしまいました。金持ちになった今はイケメンになりたいので、イケメンの肉ばかりを食べています。

STORY 28 文化祭

「えーでは、多数決の結果、今年の四組の文化祭の出し物は、おぼけ屋敷やしきということになりました。で、おぼけ役なんです
が、これは公平にくじ引きで決めたいと思います。えーでは、
ここまでで何か質問のある人」

「はい」

「はい、田村たむらくん」

「おぼけ役の人は文化祭当日まで何をすればいいんですか」

「えーそれなんです、去年の文化祭で使った毒薬が倉庫に残ってれば、それを飲んでもらって、すぐにでも役作りに入ってください。なかった場合は屋上が開放されていると思いますので、痛いとは思いますが、飛び降りをお願いします」

え？ 絶対に起きられる方法が知りたいって？ そういや
お前、朝が苦手だったな。いいぜ、無遅刻無欠席の俺が毎日使ってるすばらしい方法を伝授しよう。

使うのはこの俺特製の目覚まし時計だ。やり方は簡単。起きたい時間にセットするだけ。実は、この目覚まし時計には爆弾びくたんがしかけられている。目覚ましのベルが鳴って、十秒以内止めなければ爆発して半径三十メートル以内の人間は爆死するっていう代物だ。俺はこの緊張感きんちやうを使うことで、いまままで一度たりとも寝坊ねぼうしたことはない。ああ、ただ一つだけ注意してくれ。家を空けるときは必ずセットを解除しておくように。俺はこれを忘れて、隣人りんじんを五回殺めている。

STORY 30 あめ玉

私はあめ玉を舐める時、小さくなった最後の方はいつもガリガリとかじって食べていた。今回もそうしていた。

だけど想像以上にかたくて、いつもよりも強めにかんだらガリッて音がした。思わず口の中のものを手の中にペッと吐き出した。

手のひらの上には、小さな歯が一つ。

私は怖気おそげ立った。歯が欠けてしまった——わけではない。私の歯は一本も欠けてはいなかった。

STORY 31 ネット流出

世のどこでだれが見ているかわからないですね。一人暮らしのはずなのに、部屋の真ん中で真っ裸はだかで踊り狂おどくるってる私の動画が、なぜかネットに流れていましたよ。

STORY 32 豚骨スープ

飼い犬と散歩していた時、犬が人骨をくわえて持ってきたので、「おいおい、どこから持ってきたんだよ」と犬を追いかけると、豚骨とんこつスープを売りにするラーメン屋の裏にたどりつきました。



STORY 33 メッセージ

ある日突然、宇宙からメッセージが届いた。

『試験は終了です。観察対象の文明は消去してください。』
発信元は、月の裏側だった。

STORY 34 解剖実習

みなさん、静粛に。準備はよろしいですね。

それでは、今回の人体解剖実習ですが、『解剖実習中に遺体を切り取って遊ぶなど、不謹慎な行動をとった実習生がどうなったか』について、その結果を学んでいきたいと思えます。

それではみなさん、目の前の検体をご覧ください。

……………

ご覧いただけましたか？ ——実習は以上です。

「知ってるか。昔この公園の木の枝で、首を吊った男の死体が見つかったんだそうだ」

「へえ、こんな身近で殺人事件があったんですか。怖いですねえ」

「そうなんだよ。その死体つてのは手足が切り落とされていて、どこからどうみても自力じゃ首をくくれる状態じゃなかったんだと。でも不思議だよな」

「え、なにがですか？」

「いや、普通首吊りつて聞いたら自殺を想像するもんなんだよ。でもお前は……」

STORY 36 黒い塊を

この間友達から聞いた怖い話なんだけど。

ある時その友達が、お風呂の排水溝から黒い塊を見つけたんだった。なんだろうと思ってふたを開けてみたら、すごい長い髪の毛が『ぐちゃぐちゃあ』って固まってるってたんだった。その友達は一人暮らしで、髪も薄いし、最近、だれかが家に来たとかもないんだって。ねえ、怖いでしょ!? でもね、もっと怖いのがその友達、その髪の毛を自分の頭に移植したんだって。

「俺おれ、特技おれがあつてさ。適当おれに日付を言つてくれれば、その日の曜日しゆんじを瞬時しゆんじに当てることができる」

「じゃあ1980年の6月6日は？俺の生まれた日だ」

「金曜日」

「……すごいな。合つてる。——じゃあ、今度は未来の日付を当ててみてくれ。ちょうど百年後は何曜日だ」

「それは答えられない」

「おい、当てられるんじゃないのかよ」

「正確に言えば、当てる必要がない」

「どういうこと？」

「だって、人類がいなければ曜日なんて必要がないだろう？」

STORY 38 祖母の行方

私が幼いころ、祖父が亡くなりました。祖父の死後すぐに、祖母は行方をくらませました。きつと悲しみに耐たえられなくなり、一人であとを追ったのでしょう。そう幼心おきなごころに思っていました。

最近になって、私は祖父の遺品を整理する機会がありました。そしてとある写真を見て知りました。私が長年祖母だと思っていた人物は、祖父が女装した姿でした。

STORY 39 最後の晩餐

なにかの会話のはずみで「最後の晩餐^{ばんさん}ってなにがいい？」という話になり、適当に答えていたら、次の日の夜にそれが出てきました。

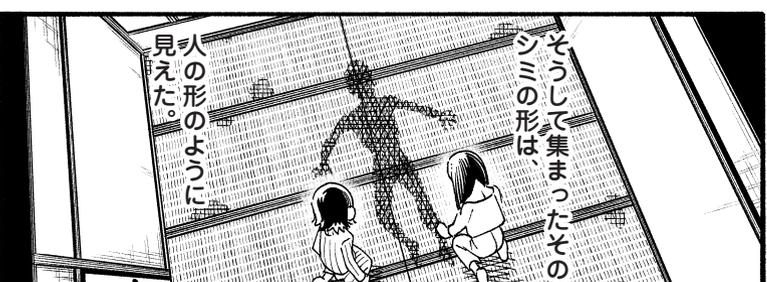
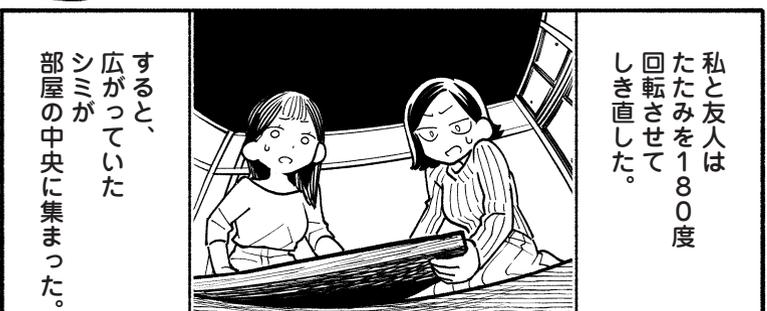
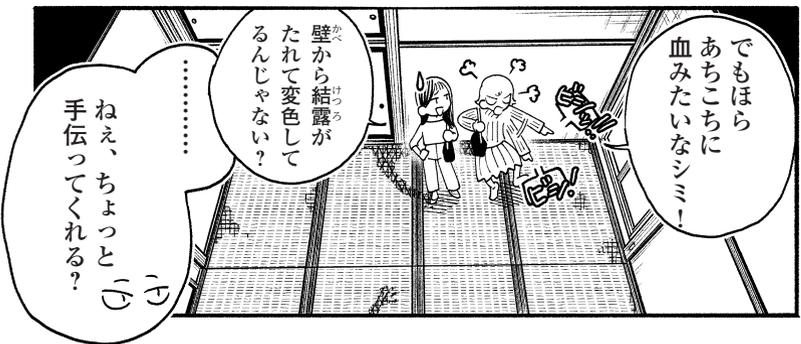
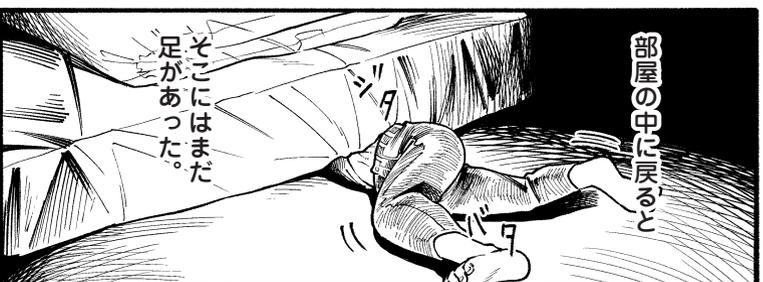
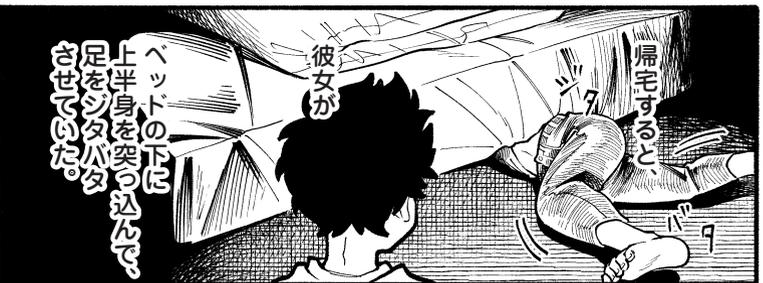
STORY 40 生きたい

銃口^{じゆうこう}を眉間^{みけん}に突きつけ、「いきたいか？」と問うと、『いきたい！』と言ったので、お望み通りあの世に逝^いかせてあげました。

第 2 章

—

10秒で終わらないゾツとする話



「いやあ、お前の部屋って結構きれいなんだな。てっきり散らかってるのかと」

「たしかに僕はけっこうズボラだけど、そりゃあ、偏見へんけんってものだよ」

「そうだな、スマン。でもさすがにあれはなんだ。なんで部屋の中に鉢植えはちがあるんだ。あれはペチュニアか？」

「うん。実はさ、数日前から雨漏りあましててさ。そんなときに、ちょうど花屋を通りがかつたら安売りされていたから、買ってきてそこに置いているんだ」

「へえ、自動水やりってわけか。でもこのアパートって二階建てだろ？ お前の部屋は一階。雨漏りはしないだろ」

「言われてみればそうだね。水漏れかな。上の人、大丈夫かな？ そういえばいつも朝にあいさつするんだけど、このところ会った記憶がないなあ。——あれ？ ちょっと待って」

「おん？ どうかしたか？」

「いやね、変だなあと思ってたんだ。僕が買ってきたのは白いペチュニアなんだ。でも今は」

「赤黒いな……。てことは」

